



開設40周年に当たり、開設当時を知る職員による座談会を行いました。

開設メンバー座談会

「メンバー」※写真左より

- 救護施設しのめ荘 施設長 木村真理子
- 特別養護老人ホーム ハッピーランドあいかわ 生活相談員 高橋 浩子
- 特別養護老人ホーム 北原荘 主任介護員 佐藤 志都
- 特別養護老人ホーム 北原荘 施設長 古木 俊一
- 特別養護老人ホーム 鮮雲荘 副主任介護員 佐藤 正和
- 特別養護老人ホーム 鮮雲荘 主任栄養士 田中 照美
- 特別養護老人ホーム ハッピーランドやまご 施設長 大瀧 静子

◆北原荘は昭和58年4月に会津で4番目の特別養護老人ホームとして開所しました。その頃、皆さんはまだ20代〜10代でしたが、当時、どのような状況や心境だったのでしょうか？

古木 当時は介護の専門資格もなく、介護職員が「寮母」「寮父」と呼ばれている時代でした。そのような中、飯塚病院の老人病棟や特別養護老人ホームエルムホームさんで実習させて頂き、開設準備を進めました。無資格、未経験の職員がほとんどでしたが、手探りでオープンまで漕ぎ着けました。職員の平均年齢は26〜27歳と若く、10代から40代までいて、活気があったと思います。

大瀧 私は27歳でした。経験者は5名前後しかいませんでした。10代の職員が高齢者のオムツ交換なんてできるだろうかという心配もありましたが、「みんなやっついでいこう」という雰囲気がありました。失敗もありましたけど、そういう気持ちがあったからやっついたらいいと思います。

木村 大変さがわからなかったからこそ、初めてのことも楽しくできたというのもありました。とにかく入所してきた方をお世話するという気持ちだけで、今思えば、「家族みたいな言葉遣いをしていいたな」ということもあって、当時、生活指導員だった古木さんは内心大変だったと思います。

高橋 私はこういう仕事をすることを全く知らなかった時に、たまたま集落の座談会にエルムホームの方が来られて話を伺って、その後、市の職員の方からの勧めがあって入職しま

古木 北原荘がオープンして、どういう施設にしていこうかということについては、「利用者のための施設づくり」と「地域のための施設づくり」を出発点としていて、それは当法人の理念にもなっています。一人ひとりの声に耳を傾けていこうという中でオムツ外しに取り組みなど、「利用者のため」という思いをエネルギーに変えていたと思います。そうやって経験のない職員が集まって一生懸命やっていましたけど、やはり福祉の知識が必要ということで、社会福祉主事の資格を全員が取得するなど専門性を高める取り組みも進めていきました。社会福祉士・介護福祉士国家資格が誕生した時は皆の悲願が叶った思いでした。

◆北原荘の長い歴史の中で、皆さんの印象に残っていることを教えてください。  
大瀧 施設行事の際にご家族に来て頂くことが多かったんですけど、ご家族から感謝の言葉を伝えられると本当にうれしくて、もっと何かしてあげたい、という気持ちになりましたね。長い間お付き合いしていると色々なお話ができるようになって、ご家族との距離も近かったように思います。それから、介護保険制度が始まる前は、会津管内の施設が集まって「芸能交流会」というものをやっていたのですが、1ヶ月前にもなると練習に熱が入って、交流会が成功した時には利用者の皆さんと大喜びして盛り上がりました。

佐藤志 私は、開設当初、男性が入所して来ると、実際に来られた方が女性で（笑）、慌てて居室の調整などを行ったのをとてもよく覚えてます。芸能交流会は、確かに衣装作りや会場への移動など大変でしたが、成功した時の達成感は大変大き



第4回 会津方部老人福祉施設芸能交流会

「利用者のため」をエネルギーに。  
木村 ご家族との距離も近かったですね。夏祭りの後の慰労会なんて、いつまでやっているのかというくらい（笑）、盛り上がりがありました。今はもう少し、一線を引いて、という雰囲気です。ボランティアの受け入れについても、当時は、手伝いに来て頂いている、という認識で、「地域に開かれた施設づくり」という意義を自分がどこまで理解できて

かったです。今よりも元気な利用者が多く、長距離の移動も可能だったので、バスハイクで色々なところに行きましたね。それから余談ですが、中庭（現在の大食堂）にはカブトムシが多く集まって来ていたので、職員が子どものために休憩時間に虫捕りなんかもしていました（笑）。  
佐藤正 私は、社会福祉主事が最初に取得した資格で、その後もたくさん研修に行かせて頂いたことが印象に残っています。自信を持って仕事ができるようにさせて貰ったと思います。  
高橋 ボランティアの方にもたくさん来て頂きましたね。リネン交換など色々協力頂きました。街でばったりお会いしていると、お互いに声を掛けたりして、その関係が今も続いているのがうれしいです。ボランティアさんが今よりも身近でしたね。それから、ボランティアさんが「ゆくゆくは私たちもお世話になるのだから、やっつて当然なのよ」とおっしゃっていたのも印象に残っています。  
田中 園外活動には給食職員も参加していたので、利用者の方やご家族と接する機会になっていました。ホーム喫茶ではボランティアの方と地域のことをお話ししたりしていましたね。



した。研修は、正直言って、きつかったです。食事も受け付けなくなってしまう。当時の老人介護の状況は今と違いましたから、これで良いのだろうかという思いと、続けていけるのだろうかという不安がありました。

佐藤正 私はたまたま就職したという感じで、無知でしたし、自分が何をしたいのかもわからないという状態でした。まだ10代でしたので、入所者の方からは本当に孫のようにかわいがって頂いた。こっそりチョコレートを頂いたりして（笑）。今の特養は、医療を含め技術の向上が一層求められているのに待遇はまだ低くて、大変だと思いませんか。

佐藤志 私は祖父がエルムホームさんにお世話になっていたので、こういう仕事もいいな、という気持ちがありました。ただ、見るのと、やるのは違いましたね。周りの方々に助けられながらやっつてくれたという感じです。それに開設時は当たり前ですけど、80人全員が新規入所者ですから。よくわからない状況の中、とにかく一生懸命やっつて、今思えば、よくこなせたな、と思います。そういえば、当時の夜勤は、日勤業務からそのまま宿直という形で入っていたので大変でした。

大瀧 その頃は「そういうもんだ」と思っていたからできて、って感じですよ（笑）。  
田中 私は、高齢者の食事作りが初めての経験で、普通の食事をもう少し細かくすれば良いのかな、という漠然としたイメージを持っていました。実際には、刻み食の方は当時10名に満たない程度でした。飯塚病院から異動してきた職員にアドバイスを貰ったり、研修会に参加したり、他施設を見学させて頂いたりしながら、だんだんとやっつていきました。



いたのかわかりませんが、時代の流れと移り変わりを感じます。

古木 措置制度が否定的に言われることがありますが、措置時代であっても、利用者のために模索しながら様々なことをやっていたと思います。会津管内の施設同士のつながりも強くて、芸能交流会のほかに交換研修もやっていました。一人ひとりの願いの実現のため、利用者の方やご家族と山形の小野川温泉や新潟の月岡温泉に泊旅行行ったことも思い出深いです。山形では米沢市の特別養護老人ホーム成島園さんと交流会も行いました。ご利用者やご家族と一緒に風呂に入ると、ご家族からは「要介護状態になってから泊旅行ができると思っていなかった」と喜んで頂きました。もう一つ、重度の要介護状態だった利用者がお亡くなりになって弔問に伺った際、ご家族から「最後までトイレに連れて行って貰えてうれしかった」と言って頂いたことも忘れられません。  
高橋 私は若い頃、お亡くなりになられた方への対応が不安だったり、怖かったりして、一人では行けず他職員に付き添って貰ったりしていました。  
佐藤正 初めての夜勤で、入所間もない方が急逝された時にはとてもショックを受けました。  
古木 以前は病院でお亡くなりになる方が多くて、看取りをきちんとした形で行うようになってからは、介護保険制度以降ですからね。

◆介護保険制度による変化は大きかったですか？  
大瀧 制度上、ケアプランが位置づけられたことで、私自身はご家族とお話しする機会が増えて良かったと思います。  
古木 それ以前も個別処遇計画は作成していたの

